

人権ほっと30年 1月号

「自信が育つ背景」

大阪教育大学准教授

安達 智子

新しい世界に踏み出そうとするときや、何かにチャレンジするとき、私たちは「うまく出来るかな？」と心の中で自信の程度を確認します。十分に自信がある時は実行に移しますが、自信がもてないと行動をためらったり、自分の能力が露わになる場面を避けようとしみます。このように、自信がもてるか否かは、日頃の私たちの行動に看過できない影響を及ぼすものです。そして心理学の研究では、この自信のもちように男女差があることが知られています。たとえば、色々な職業をあげて、男児と女児に「上手に出来ると思う？」とたずねると、男子は運転手やスポーツ選手などに自信があり、女子は保育士や看護師などに自信をもつ傾向がみられます。このようなにまだ働いたことのない幼い子どもたちの自信に男女差がみられる理由として、

体験の違いがあります。たとえば、男子は乗り物の玩具やボールで遊ぶことが多いのに対して、女子は、おままごとや人形を使って世話をするような遊びの機会が多い、これが男女で異なる活動への自信を育てます。また、性別によってお手本にする人物が違って、これも関わりをもちます。つまり、運転手やサッカー選手は圧倒的に男性が多く、人を育てたり世話をする領域では女性が多く働いています。そして、子どもたちが将来を描くときに自分と同性の人物をお手本にすることが多いのです。そのために、同性が多く活躍する仕事への自信が育ちやすくなります。

近頃では操縦、スポーツ、科学などの領域で頑張る女性が増えてきました。看護、養育、美容などの分野で活躍する男性もいます。子どもたちが色々な体験やお手本にめぐまれて、性別のわくに縛られることなく将来の可能性を広げていけると良いですね。